

# ドイツ語圏における観光概念の形成過程

——ドイツ観光経営学研究の1章——

大 橋 昭 一

## I. ま え が き

観光は、多様な形態があること、関係する分野や領域が多岐にわたること、さらには人間の活動・生活そのものであることなどのため、統一的規定が困難で、今日でも多くの試みがなされている。そうした試みは、米英でも盛んであるが<sup>1)</sup>、ドイツ・オーストリア・スイスの一部などドイツ語圏でも、実に多様に行われている。ちなみにドイツ語圏では、日本で通常観光といわれる言葉に相当するものに大別して2つの言葉があり、しかも論者により解釈や理解が異なるものとなっている。

ドイツ語で通常観光に相当する言葉は、本来は **Fremdenverkehr** である。これは「他者ないし他所との交流あるいは往来」を意味し、観光よりも広いニュアンスがある。たとえばそれを端的に「外来者往来」とし、以下でみるように、商用や職業活動など営業活動のための旅行・一時的滞在などをそれに含める見解がけっこう強い。

ところで、第二次世界大戦後ドイツ語圏でも英語文化の浸透が激しく、**Fremdenverkehr** の代わりに英語の **tourism** にあたる **Tourismus** が使用される例が多くなっている。たとえば1996年の „Brockhaus · Die Enzyklopädie“ (20. Aufl.) では、観光に相当する言葉として **Fremdenverkehr** に代わって **Tourismus** が見出語とされている (22. Bd., S. 216-219)。

もっとも **Tour** は、円を描く道具という語源に基づいて、ドイツ語でもたとえば機械などの回転数を **Tourenzahl** といったり、1893年ビスマルク (Bismarck, O. v.) が公法職公務員 (Beamte) のキャリアを **Ochsentour** と特徴づけたりした形で種々使用されてきた。観光・旅行関係でも **Fußtour** (徒歩旅行)、**Ferientour** (休暇旅行)

などといった形で用いられてきた。

**Fremdenverkehr** に代わって **Tourismus** がドイツ語圏でも広く使用されるようになったのは、オパショウスキ (Opaschowski, H. W.) によれば、とくに1970年代になってからで、国連が1967年を国際観光年 (International Tourist Year) とし、それがドイツ語では **Jahr des Welttourismus** と表現されたことが一つのきっかけとなっている。1960年代では、ドイツ語圏で刊行されたドイツ語辞典で **Tourismus** という言葉が収録されていないものもある<sup>2)</sup>。

もっとも今日でも、**Fremdenverkehr** と **Tourismus** は同義語とされている場合が多い。前記 „Brockhaus · Die Enzyklopädie“ などでもそうである。しかし、タイトルや表題等では **Tourismus** が多くなっている<sup>3)</sup>、この2つの言葉がもつ語意、ニュアンスの違いは否定しがたい。

一方、ドイツ語圏では、もともと観光が盛んなことや、物事を体系的にとらえ言葉を厳密に規定しておきたいとする歴史的伝統もあり、観光について概念的に規定する試みが種々行われてきた。

本稿は、以上の事情をふまえ、ドイツ語圏における観光経営学研究の一環という立場において、ドイツ語圏で **Fremdenverkehr** についてどのように規定する試みが行われてきたかの論究を問題意識とし、その特徴的諸点の解明を課題として考察を試みるものである。**Fremdenverkehr** の邦訳語として観光が適切かどうかという問題があるが、以下では、とくに断らない限り、観光は **Fremdenverkehr** をさし、考察対象も1960年代末ごろまでに限定したものである。

**Fremdenverkehr** か **Tourismus** かは別として、ドイツ語圏で観光がとにかく学問的理論的に論究されるようになったのは、以下でみるように20世紀初頭のころか

らであるが、多少とも本格的な研究が進められるようになったのは、第一次世界大戦後の1920年代になってからである<sup>4)</sup>。それから第二次世界大戦ごろまでは一般に観光研究の創成期(Gründungsphase)といわれ、これにつづく第二次世界大戦後は、1970年代ごろまでの専門的深化(Spezialisierung)の時期と、その後における量的質的な爆発的發展(Umbruch)の時期とに大別される。この第3の時期は名称のうえでもFremdenverkehrslehreからTourismuslehreへの移行を1つの特徴とする<sup>5)</sup>。このように観光研究の時期区分をすると、本稿は最初の2つの時期を対象としたものである。

## II. 観光概念の形成の試み

ドイツ語圏を含め、欧米で観光が広く一般的となり一般的に盛んになって、今日のような観光活動の発端になったのは、20世紀初頭のころで、これを基盤に個別的にしる観光を学問的に究明する試みが始まった<sup>6)</sup>。

その要因として何よりもまず、観光の大衆化・大規模化が始まり、観光が大きな社会的現象となってきたことがあげられる。それを生んだものは、一方では、鉄道の本格的普及、ホテルなど観光関連施設や制度の整備など、観光を普及し発展させる直接的条件の整備が急速に進んだことである。これは、他方において、働く人たちの労働時間短縮や休暇制度が緒につき自由時間が増加しはじめたことや、所得の向上などにより一般大衆にも観光が比較的容易なものとなってきて、観光希望が高まり広まったことによって支えられ、実効のあるものとなった<sup>7)</sup>。

こうした観光の広まりの結果、観光地の自然環境、文化的社会的環境、経済的環境は大きな影響を受け、社会的に大きな問題となってきた。観光は、基本的には、外部から来た観光客が一時的に滞在して行う消費活動であるから、観光地の長期的な生活基盤、生産や商業などの営業基盤にたいし善きにつけ悪しきにつけ深い影響を与える。観光が大衆化し大量化するとともにその問題性が顕在化してきたのである。

その場合、とくに経済的側面が多くの場合さしあたりまず大きく注目された。というのは、営業活動はもとより生活活動にしても根本は経済的側面にあるから、観光客が観光地において消費活動を行うことによる経済上のアンバランスが、さしあたりまず問題となってきたからである。こうした事情を背景に、ドイツ語圏では、観光研究について、まず、経済的側面を中心に国民経済学あ

るいは経営(経済)学の観点から究明を行う経済学的アプローチがさしあたり比較的主流をなしてきた<sup>8)</sup>。

### (1) 先駆的試み

そうした試みとしてまず、シュトラドナー(Stradner, J.)の1905年の著『観光』(Der Fremdenverkehr)をあげることができる<sup>9)</sup>。かれは観光について経済学でもロツシャー(Roscher, W. G. F.)等によりすでに種々言及されてきたことを指摘したうえ、観光が経済的には消費活動であり、観光は要するに、他の所の者(Fremde)が自由意思に基づいて定住的場所以外の所に滞在することであり、そこでは所得獲得活動をするのではなく、なんらかの奢侈的欲求(Luxusbedürfnis)を充たすだけのものであるが、その欲求は観光地としては外部からのもの(fremdes Bedürfnis)であることを指摘した。

したがって経済的にみると、観光は、消費者としての観光客が観光地にたいして行う一面的な関係である。その場合、観光地の観光商品生産者等は経済的考慮にしたがって行動しているが、観光客は自らの所得獲得活動から離れ、必ずしも経済的考慮にはたたない動機で動くことが多い。観光客への販売は、販売・輸出の拡大と同じ効果をもつから、価格騰貴などの経済的アンバランスを生み、かくて観光地の地代騰貴をもたらすことなどを指摘した。

その一方かれは、観光地理学(Fremdenverkehrsgeographie)の概念を提起し、その課題は自然地理のおよび人文地理的な要因が観光に及ぼす影響を研究するところにあるとしている。これらのうえにたつて、森林など自然資源が観光という観点からも国民経済的財(volkswirtschaftliches Gut)としての属性をもつことを明らかにし、自然の保護にはこうした国民経済的財の使用価値を保全するという意義があると論じた。

このように、シュトラドナーにおいて観光の経済的側面はすでにかんがりの程度分析、検討されており、それは今日でも先駆的試みの代表的なものとして評価されている<sup>10)</sup>。

つづいて1911年シュレルン・ツウ・シュラッテンホーフェン(Schullern zu Schrattenhofen)は、観光の国民経済的意義を論じている<sup>11)</sup>。経営経済的私経済的意義とは区別された国民経済的意義である。観光の規定としては、最狭義の規定として純粋な保養や楽しみなどのために観光地を訪れ滞在する場合に限定したものが考えられるが、しかしそうしたものを職業活動上そうするものから区別することは実際には不可能とし、「観光とは、

[その土地に] 異質の者 (Fremde) がある特定の地域・地方・国家へ流入し、そこに滞在し、そして流出することに関連し、かつそれと直接結びついているすべての諸事象の総体であるが、何よりも経済的諸事象の総体である<sup>12)</sup>と定義した。そして、観光は国民経済的には、外貨の問題に典型的にみられるように、結局、国全体として、すなわち非観光地を含めた問題として扱われるものであると、論じた。

さらに第一次世界大戦直後の1919年シュプッツ (Sputz, K.) は、観光の発展が文化的あるいは社会的な環境に与える影響とともに、国民経済的意義や経済的価値について考察しているが<sup>13)</sup>、そこでは観光の経済的有用性のみならず、問題点も比較的強く指摘されている。観光の経済的有用性としては、シュトラドナー等と同様な観点において農業や牧畜などこれまでの産業には不適當な土地や場所が観光により経済的に有益なものとなることや、観光地の地元産業に新たな発展可能性が生まれることなどが指摘されている。観光発展の問題点としては、経済的アンバランスにより価格騰貴がおきるおそれがあることや、ホテルなども投下資本からみると収益性は必ずしも高いものではないことが指摘され、観光の経済的有益性は決して過大評価されるべきものでないことが強調されている。ここには、第一次世界大戦後のドイツ語圏の経済事情が反映されている。

## (2) 古典的規定の試み

こうした研究を集約し、ドイツ語圏観光研究に1つの礎石をおいた古典的試みとみられるものに、モルゲンロート (Morgenroth, W.) が1927年にまとめたものがある<sup>14)</sup>。

モルゲンロートによれば、観光はまず、人間の遍歴 (Wanderung) の一形態である。しかし遍歴一般ではなく、少なくとも一時的遍歴であって、期間に長短はあるが、定住場所を一時的に離れるものである。そこで、観光は、本来の意味においては「種々な種類の生活上の欲求、文化的欲求あるいは個人的願望をみたすために、単に経済的財や文化的財の消費者として、自己の定住場所以外の所で滞在するため、定住場所を一時的に離れる人々の往来 (Verkehr) である」<sup>15)</sup>と定義される。

この場合、「単に経済的財や文化的財の消費者として」というところに、それが経済的アプローチであり、観光が消費活動であることが明確にされている。そしてこの点において、営業上や職務上で観光地を訪れるものとは性格が異なるものとされる。しかし、日本の観光概念よ

りは広いニュアンスのものとなっている。

観光の国民経済的意義として、観光地以外で稼得された所得がそれとは別の観光地において消費されること等についても理論的整備が行われ、それは観光客の本来の所得獲得地からの所得流出であるから、両者は、シュレレン・ツウ・シュラッテンホーフエンにならって<sup>16)</sup>、観光活動による所得活動の消極的 (passiv) 側面と積極的 (aktiv) 側面として対比させられる。観光資源活用による特別収入はそれまでの論者にしがたい地代の一種とされるが、しかしその基盤をなす観光資源はシュトラドナー等より一歩進め、これを国民経済的資本 (volkswirtschaftliches Kapital) と規定し、そうした観光資源はじめ、観光地整備のための道路などのインフラ等をまとめて資本としてとらえる。

このうえにたつてモルゲンロートは、観光振興による問題点・デメリットを指摘するが、全体としてみれば、観光の開発・振興・発展にはこうしたデメリットを上回るメリットがあると主張する。たとえば、観光の発展により、それに従事する人の労働時間が長くなったり、不規則になったりするが、他方では、所得増加などがあり、結局メリットの方が大であるとする。また、観光発展により経済的に潤うのは直接的従事者だけではないかという批判があるが、それ以外の分野や領域にも波及効果があると反論している。

さらに、観光発展にたいする異論には、既述のように当時、観光地における経済的アンバランスによる物価騰貴などが指摘されていたが、これにたいしてもモルゲンロートは、それは物資などの供給不足からおきるものであって、問題は流通機構の不備などにあり、観光の発展そのものに問題があるのではないと反論している。

以上のようにモルゲンロートは、観光を経済的側面を主として考察しているが、しかし他の文化的側面や社会的側面などを無視しているのではない。どちらかといえ、逆である。というのは、観光の根本的動因は、かれによると人間のもつ遍歴したいとする衝動 (Wandertrieb) であり、他の人と交わりたいとする欲求 (menschliche Geselligkeit) であって、それは基本的には非経済的なものであるからである。この根本的動因は、なんらかの気晴らしをしたい欲求、風景などを楽しみ見聞を広めたい欲求、美術工芸品等を鑑賞したい欲求に大別されているが、観光によって文化面でも広く文化交流が進むとともに、自国文化について理解が深まり、教養・文化の向上に資するとしている。

その一方、モルゲンロートは観光発展による文化交流

により、観光地における独自の文化・習慣・風紀等が乱れ、他の良くない習慣や風紀に染まるおそれのあることを問題点としてあげている。しかしこの問題でもかれは、そうしたことは観光地住民の断固たる意思や行動で防ぐことができるとし、いずれにしろ「観光地にもたらされるメリットは、部分的に生じるであろう日常生活上のデメリットを、著しく凌駕する」<sup>17)</sup>と述べている。

こうした問題点を指摘する方向線上において、かれはさらに、観光発展が過大に進められることによるデメリットに警告を発している。かれは、観光発展が「他の生活上や文化上の状態に全く照応しないような程度に、そしてそれらが持続的に (dauernd) 維持されえないような程度」<sup>18)</sup>にまで推進されることをハイパー状態 (Hypertrophie) とよび、断然避けるべきであると強調する。ここには、最近強く主張されている観光の持続可能な発展の思想に通じるものがあるし、当時観光が大衆化し大量化していることにより生じる問題性が十分意識されている。

そこで、観光政策についても、観光を開発・振興・発展させることとともに、観光のハイパー化など望ましくない現象を制御することという二重の課題があるとしている。このようにモルゲンロートの主張では、観光発展によるデメリットや弊害のありうることを十分に意識し、そのうえにたってメリットとデメリットとを比較すれば、メリットの方が大きいという主張を行うところに何よりも特徴がある。その意味では観光発展についての全くの楽観論ではない。またその場合、観光発展によるメリットとしては結局経済的なものが主となるから、こうした点からいえば、それは根本的には経済に志向した考察といえる。

なお、実質的にはモルゲンロートの試みと平行して、1931年ボルマン (Bormann, A.) は、観光学は経済学に所属するものであり、その根本的諸問題は国民経済学や経営 (経済) 学の領域に存在するとするとともに<sup>19)</sup>、観光については、勤務先への定期的交通を除いて、「それが保養、遊覧、商用、職業活動などのいずれを目的とするかを問わず、また、特殊な催しや事情のためという多くの場合を含め、定住地から一時的に離れる旅行のすべてもの」<sup>20)</sup>をいうと規定している。

これは、観光を、統計的把握の可能性も含めて規定しようとする、職業活動等のための旅行・一時的滞在も観光に含めざるをえない一例であるが、すでにシュレルン・ツウ・シュラッテンホーフェンにみられるように、ドイツ語圏ではけっこう強くみられる考え方である。今

日でも既述の „Brockhaus · Die Enzyklopädie“ 等はこの見解をとっている。

### (3) 地理学的規定の試み

以上のような試みにたいして、1939年ポザー (Poser, H.) は、それらが少なくとも地理学的にみた観光の特徴を十分にとらえていないと批判し、自己の試みを提示する<sup>21)</sup>。かれによれば、観光の基本は、他の土地の者 (Fremde) が観光地の人・物・風物などと交わる場所にあるから、旅行 (Reiseverkehr) は観光概念から除外されるべきものであり、他方、観光地における観光客と地元民との相互関係・交互作用 (Wechselbeziehungen und Wechselwirkungen) が本質的要素として重視されるべきものとなる。

旅行を観光概念からはずすべきとする点については、当時、交通手段の一層の発展によりとにかく旅行することを楽しみをおく人が増え、旅行が自己目的的なものとなりつつあった事情がある<sup>22)</sup>。それによって滞在日数が減少したといわれるが、そうした傾向は、ポザーには他者ないし他所との交わりという観光の本質に悖る傾向であった。ここには他者ないし他所との交わりを重視するポザーの主張が端的に現れており、かれの試みはドイツ語圏観光地理学に決定的影響を与えたといわれている<sup>23)</sup>。

さらにポザーはこうした観点にたって、観光 (現象) にとっては他者がその地域である程度の期間滞在したり、ある程度の観光客があるなど積み重ねのあること (Fremdenhäufung) が重要であると強調する。あまり短い滞在では交りが困難で、それは結局単なる旅行と変わらない。こうした積み重ねによる相互関係・交互作用が観光に照応した経済的関係・交通状態・風物を作り出す元になるというのである。ここには、休暇は特定地域に滞在してその土地の生活を楽しむというヨーロッパで多くみられる傾向を看取することができる。

そこでポザーによれば、観光は端的には「とにかく一時的な滞在という目的をもった他者による地域的積み重ねで、そうした他者と地元民・地域そのもの・風物との交互作用の集まりを内容とするものである」<sup>24)</sup>と定義される。

それ故観光にとっては、一群の積み重ね的観光客がいるとともに、そうした観光客の世話など対応に従事する一群の地元民の存在することが不可欠であって、観光地というものは特有の地域像 (Gepräge des Ortsbildes) をもつことが必須であるとする。つまり、観光地は、第1

に他者の積み重ね、第2にそれによって生じる地域の特徴(Physiognomie)、第3にそれ相当な経済・交通の構造をもつ。

さらに観光地には、それを支援する観光客の到来・受け入れのための地域や機構(Fremdeneinzugsraum)と、観光客が消費する物品等の供給を支援する後方支援地域(Ergänzungsraum)が必要で、観光地は広くはこれらの地域・機構・施設等と一体的なものであって、総括的というならば、工業地風景(Industriellandschaft)や農業地風景(Agrarlandschaft)に対応した、それぞれの観光地特有の観光地風景(Fremdenverkehrslandschaft)があると主張した。

### III. 古典的概念の発展・深化の試み

第二次世界大戦後(西)ドイツは、1949年以来約9年間にわたり「奇跡の経済発展」といわれる経済成長をとげた。この間(1949~57年)同国の国民純生産(NNP)は約2.6倍の増加を示したが、観光支出はこの間に16億DMから153億DMへと約9.5倍の著増となり、国民純生産に占める割合は0.02%(1945年)から0.08%(1957年)へと高まった<sup>25)</sup>。こうしたことを背景に、観光についての理論的取り組みも一段と深く深いものとなった。

#### (1) 古典的規定の発展・深化

すでに1940年代において、モルゲンラートの規定を引き継ぎ、さらに広い視野において展開し、今日でも代表的な古典的規定といわれるものを提示したのはフンチカーである<sup>26)</sup>。かれは、観光を社会学的な文化現象としてとらえ、観光とは「その土地に異質の者(Ortsfremde)の旅行と滞在から生じる関係と現象の総体をいうが、ただしその滞在は定住にならないものであり、したがって所得獲得活動(Erwerbstätigkeit)とは結びつかないものである<sup>27)</sup>と定義した。

その際学問体系的には、まず、観光全体の学問として「観光科学論」(wissenschaftliche Fremdenverkehrslehre)があるが、それには「観光学総論」(allgemeine Fremdenverkehrslehre)とともに、「観光学特論」(besondere Fremdenverkehrslehre)があり、経済的側面の問題などは後者の観光学特論で扱われるものとする<sup>28)</sup>。観光については、これまで主として経済的側面に関心が注がれてきたが、「それは観光の一部分をなすものであり、……その限りにおいて観光は経済的範疇たるものである<sup>29)</sup>こと

が看過されてはならないと、かれは強調している。

このうえにたつて、現在(当時)における観光の特徴的動向として、まず量的増加の傾向をあげる。その第1は観光客の量的増加で、一般観光客が著増していることをフンチカーは観光の民主化(Demokratisierung des Tourismus)とよんでいる。これによって経済的にみると、一人あたりの平均観光支出額は低下したが、全体としての観光支出額は低下していないと、改めて指摘している。

さらに観光仕様において、一方ではルーチン化、レディーメード化が進むとともに、他方では個別化の欲求が強くなって、多様化傾向が進んでいることを指摘している。この関連においてかれは、観光目的地の多様化が進行し、観光立地が大きな問題となってきたことを指摘している。その場合、観光立地の考察方法には、大別すると、経済的側面に志向したものと、自然的あるいは文化的な観光資源の特性に志向した地理学的方法とがあるとしている。

この関連において、観光を通じた所得の移転効果についても、フンチカーはそれを調整機能(Ausgleichsfunktion)と名づけ、観光のきわめて重要な機能と位置づけている。しかもこの点においてかれは、それが人口や経済の都市集中化に反作用する意義があること、これにより観光地の中小企業の強化が可能になることを指摘し、モルゲンロートよりも観光の意義をより積極的に強調している。

同様な趣旨においてかれは、さらに、観光のこうした積極的意義にもかかわらず、発展途上国などにおいて究極的な経済発展が工業化を中心としたものとされると、とくにそうした国においては観光が経済発展のてこ入れ的機能だけのものとして利用され、経済発展とともに経済全体に占める観光の役割は小となる恐れがあることを指摘している。モルゲンラートらが観光に力を入れ過ぎることによる弊害に警告的であったとするならば、フンチカーは工業化に力を入れ過ぎる傾向のあることに警戒的であるといえよう。ここには、当時(西)ドイツの急激な工業を中心とした経済発展への問い掛けがみられる。

#### (2) 地理学的規定の深化

ポザー等により推進された地理学的規定については、何よりも1955年クリスタラー(Christaller, W.)が展開した「周辺地志向」(Drang zur Peripherie)を中心とした主張が注目される<sup>30)</sup>。ドイツ語圏で盛んな「自然の友」

(Naturfreund) 運動などとの観点からもここではとくにそれに言及しておきたい。

これは産業立地論の一環として、観光立地論の命題として提起されたものである。たとえば農業では平坦地域が立地の基礎となるし、鉱業ではそうした鉱物資源のある所、海運業では港湾や海岸、商業等では人口の多い都市部が立地の基礎になる。それと同じような意味で観光(業)の立地の中心になるのは、基本的には人口の少ない自然の豊かな山野や森林地域など周辺地域であるというものである。

さらにクリスタラーは、これはこれまでの観光の発展史からも導き出されるものと主張する。これまでの歴史をみると、とくに20世紀になって観光の大衆化が進んできたが、自動車旅行なども普及してきた結果、これまで知られていた観光地が溢れるようになり、キャンプ等も盛んになって、今や人々が観光において周辺地を求める傾向は一段と高まり一般的になったとする。

その場合、クリスタラーは観光地が一種のサイクル的変遷を遂げるものと主張する。すなわち、観光地は多くの場合まず画家等によって見出され、文学者などの注意を集めて、徐々に多くの人に知られ、大規模ホテル等も建って商業化してゆくが、そうした状況になると先進的観光客はそこから離れ、別の周辺地を求めるようになる<sup>31)</sup>。

こうしたクリスタラーの考えは、仕事から離れたときには、人々は仕事の間から離れた所で過ごしたいとする欲求があるという考えを基礎にしている。すなわち、一般的基本的に考えると、人々の流れには相対した2つのものがあり、経済的活動では人口過剰な地域に志向し、周辺地から経済集中地へ志向するが、仕事を離れた場合には反対に、経済集中地から周辺地に志向する。観光における人々の流れは基本的には後者のもので、たとえば別荘を設けようという場合に典型的にみられるものである、とする。

そこでかれは、観光を交通関係の一環とし、たとえば交通地理学の一部として位置づけることは全く不当であるとする。「観光に関連する交通の手段や方法(Verkehrsweg)は観光にとって主要なものではない<sup>32)</sup>」と。ここには、観光は何よりも滞在とするポザー以来の伝統が強く維持されている。というよりは、周辺地志向そのものがそうした伝統をさらに推し進めたものである。

ただし、クリスタラーは、観光における周辺地志向が、たとえば商業の都市部志向と同様の確実性で指摘で

きるものではないと、その絶対性を主張してはいない。観光についても人々の嗜好変化(Geschmackswandel)があり、都市観光もありうるし、その場合でも古代や中世の古い建物志向から近代的な建物志向への変化などがありうることを十分認めている。

そうした限定つきのものにもかかわらず、以上のようなクリスタラーの主張には、その後ドイツ語圏でも、少なくともその一般妥当性について多くの批判が提起されている<sup>33)</sup>。第1は、それは休暇旅行など観光の一部のみを前提にしているものであって、それ以外の、たとえば文化財や宗教施設等を訪ねるものが考慮されていない。とくに都市観光は全く前提になっていないという批判である。第2は、観光を行うについての情報収集・時間・労力の手間やコストの観点で考慮されていないという批判である。こうした諸点を考えると観光の行き先は別になるかもわからない。第3は、他の農業や商業の立地論とくらべてあまりにも限定的で、立地論として限界が高すぎるし、人々の居住地と観光地(周辺地)との対照も根拠が十分でないという批判である。

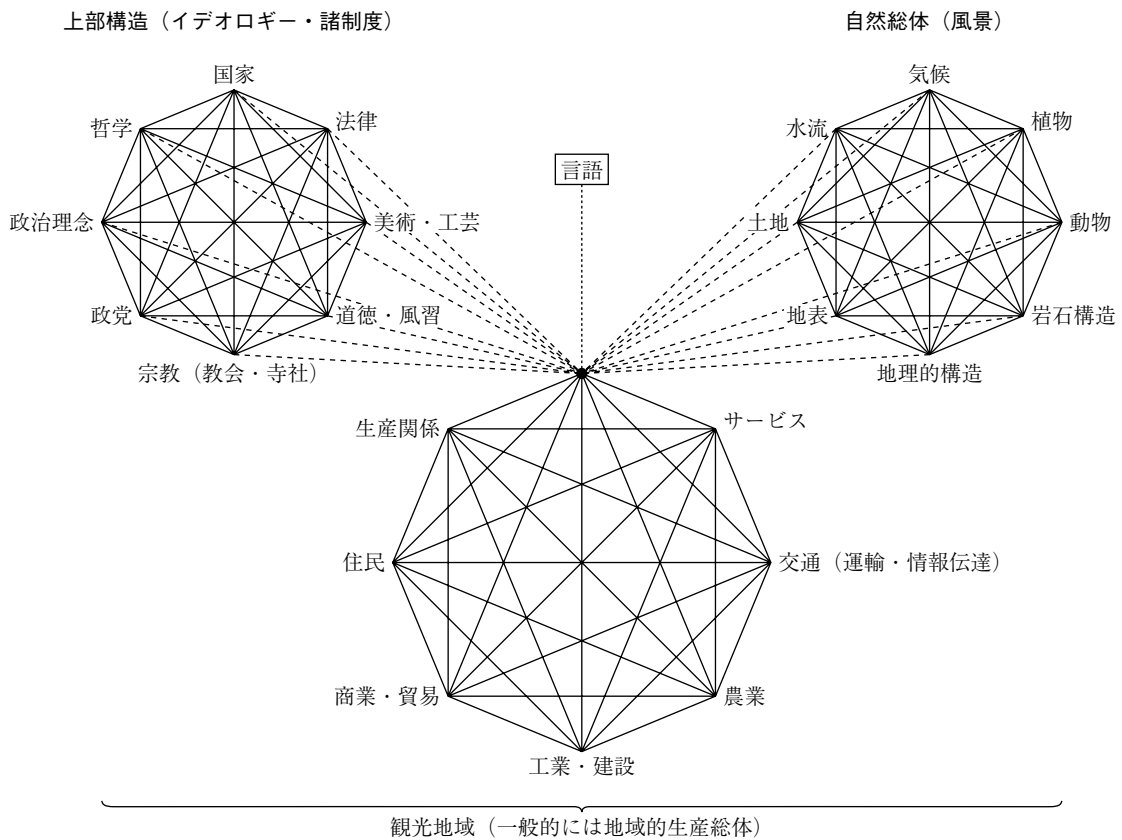
こうした批判は、直接的にはいうまでもなく観光についての考え方の相違からくる。クリスタラーの主張は、多様な観光形態のなかにあって貫通する、人々が究極的に求める一本の赤い糸のようなものを指摘しようとしたものであるが、「自然の友」運動の理念等を斟酌しても、観光の概念規定としては実際の状況から乖離し過ぎているところがある。それはつまり、実際の状況から離れた理想的なもの、あるいは規範的のものという色彩が濃い。仮りにそうとしても、そうしたものとして価値あるものであることはいうまでもない。

#### IV. 観光の総合的把握の試み

観光は、冒頭で一言したように、何よりも多くの分野や領域から成る総合的事象であり、統一的学際的事象であることを特徴とする。そこでこうした総合化統合化の試みがドイツ語圏でも第二次世界大戦以前においてなされてきた。

たとえば、1934年グリュンタール(Grünthal, A.)は、直接的には観光の統計的把握のうえに、それを観光地図でどのように表現するかという問題意識にたつて、それには観光の広がりや構造、および観光と他の諸要素との関係が明らかにされる必要があるとする。観光学(Fremdenverkehrswissenschaft)の発展のためにも、観光地図ではそれぞれの観光地を条件づけるところの、関係

図1 観光地域モデル



(出所) Jacob, G., Modell zur regionalen Geographie des Fremdenverkehrs, *Geographische Berichte*, 13. Jg. Heft 1, 1968, S. 53.

する決定的な地理的要因が提示されることが必要と主張している<sup>34)</sup>。

こうした歴史的経緯のもとにおいて、第二次世界大戦後 1968 年ヤコブ (Jacob, G.) は、同年秋ドレスデンで観光地理学の国際的会議が開かれた際、学問的に根拠づけられ、一般に認められる観光の定義のまだないことが何よりも問題であるとし、観光に直接的ないし間接的に関連する分野・領域を全面的に統合する枠組みを提示した<sup>35)</sup>。

かれはまず、観光地理学を経済地理学 (ökonomische Geographie) の部分学科とし、観光地理学を「観光の空間的広がり、観光の自然的および社会的な基礎と前提、観光と観光地域 (Fremdenverkehrsorte und -gebiete) とのあいだの相互作用を研究するものであり、かくてそれはまず第一に観光地域の地理学である」<sup>36)</sup>と規定し、観光地域と、そのなかでしめる観光の位置について図1のようなモデルを提示した。そのうえにたって、観光と関連分野・領域との関係を直接の関係と間接の関係に分け、図2のように示している。

その場合、ヤコブの規定によれば、観光地域は何よりもまず一般的な地域的生産総体 (territorialer Produktionskomplex) に相当するものであって、生産になぞらえて観光の位置づけを展開していることが大きな特徴である。かれの試みには、細かくみれば、少なくとも今日の段階からみれば、多くの問題点が指摘されうるが、それは端的には唯物史観的観点にたった観光へのアプローチといえるものであって、観光を人間活動全体の視野のもとにとらえようとする枠組みを提示したものという意味は認められるべきであろう。

## V. あとがき

以上のようにドイツ語圏では観光について種々な規定が展開されてきた。もとよりこのような多様な見解はこれをいくらかでも増やすことができる。ヤコブのいっているように<sup>37)</sup>、それは論者の数だけあるともいえる。そうした種々な見解のあいだにおける相違点は、本稿で取り上げた論者でみる限り、まず、観光の構成内容につい

図2 観光と関連領域との関係

<b>1. 観光</b> 観光政策	直接的 $\longleftrightarrow$ 間接的	<b>生産関係</b> a) 休暇の権利 b) 社会的諸制度（休暇奉仕制、社会保険、青少年休暇施設等） c) 経済政策（観光振興、資本投下、外国旅行用外貨準備）
<b>2. 観光</b> a) 労働力の再生産 b) 教育・教養増進機能（文化、歴史政治等）	直接的 $\longleftrightarrow$	<b>住民</b> a) 観光の消費者 b) 観光経済のための潜在的労働力
<b>3. 観光</b> a) 観光進展の結果としての新入植の創出 b) 入植の構造、その建設・拡大、入植形態の形成は積極的影響力を持つ c) 当該観光地区の入植機関の持つ特有の観光用施設・制度 d) 入植にともなう交通開発 e) その地域における入植地の機能的位置への影響	直接的 $\longleftrightarrow$	<b>入植</b> a) 当該観光地域における定常的観光用滞在のための前提（宿舎、生活維持） b) 入植の構造・形態・形態は観光の促進要因または阻害要因になる c) 入植地の交通状態、住民集中の状態は観光の促進要因または阻害要因になる
<b>4. 観光</b> a) 観光地域への工業の悪影響を排除するための保護地域や工業禁止地域の設定 b) 工業密集地帯の近くにおける近接的観光地帯の設置 c) 建設体制は観光資源の拡大・新設・再建等の前提	直接的 $\longleftrightarrow$	<b>工業・建設</b> a) 新工業地帯の建設や鉱業活動の結果観光地帯が危険なものになり狭隘化する b) 観光価値への悪影響（排気ガス、大気汚染、水質汚染、騒音等） c) 工業や工業集中の巨大立地は観光の重要な生成基盤となる
<b>5. 観光</b> a) 冬季スポーツなどによる労働力の部分的拘束	かなり 間接的 $\rightarrow$	<b>農業</b> a) 観光地域における生活維持の確保（牛乳や野菜など観光客用の日常生活用品供給への部分的特化）
<b>6. 観光</b> a) 交通手段や道路への負荷 b) 迅速さ・快適さ・交通機関接続状況など交通上の特別の要件 c) シーズンの差異や時間的差異の交通体制に及ぼす影響 d) 観光の大量化による新しい交通形態確保の必要性（特別列車、自動車旅行列車、時間帯による増便・減便） e) 特別な交通手段や道路の必要性（ケーブル、リフト、駐車場、サービス施設等）	直接的 $\longleftrightarrow$	<b>交通</b> a) 交通・輸送需要の充足 b) 観光地区や観光地域の開発 c) 観光促進手段としての交通開発・整備、交通のガイドとしての交通ルート d) 地域的観点における配分機能 e) 交通のマイナス要因（騒音、塵埃、排気ガス、交通渋滞等）
<b>7. 観光</b> a) 観光進展による質・量における商業活動の活発化 b) 観光の地域的配分による商業的地域的分散化 c) 特産品や観光用品の買い手としての外国人観光客の重要性 d) 外国人観光客からの外貨収入は外国取引上重要な外貨量 e) 外国人観光客への販売は国内製品の重要な市場（見えない輸出）	直接的 $\longleftrightarrow$	<b>商業（国内取引、外国取引）</b> a) 観光施設の運営維持の確保 b) 多様な観光用品 c) 住民の購買力は観光を通じたものとなる d) 観光地域の消費志向地域化 e) 国の対外取引領域であり、同時に観光の流入・影響領域でもある（広告・宣伝） f) 対外取引・対外政策・外国人観光客は政治的経済的関係統合の証しであり、国際関係の先達である
<b>8. 観光</b> a) 自然諸要素の利用（能動的な場合と受動的な場合） b) 自然上の観光資源の開発・形成 c) 自然的観光資源価値の低下・減少・過重負担	間接的 $\longleftrightarrow$	<b>自然諸要素</b> a) 観光・保養の前提 b) 自然諸要素の有用さ無用さは観光の促進要因または阻害要因になる c) 自然諸要素は自然上の観光資源
<b>9. 観光と上部構造との関連</b> 両者の直接的関係は下記の通り。間接的關係はとくに生産関係を通じた形で存在する。		
a) 国	<b>家：</b> 法律的措置や規定により観光発展を促進する積極的役割を持つ（本質的前提としての憲法や休暇の権利）。 <b>法律：</b> 社会成員の自由時間増加の方策、すなわち、観光参加の決定的前提としての労働時間短縮、休暇の増加、生活水準の向上（最低賃金や年金の引上げ等）。 <b>国家的施策：</b> 観光および観光地域の振興策の策定（観光地域の開発と拡大のための助成）。 <b>国家相互間：</b> 友好関係の確立や友好条約の締結、国際的観光の前提としての外貨準備。	
b) 法	<b>律：</b> 観光関連法規に反映（例えば、観光仲業者や関係者との契約上の諸関係。国家間では国際的なものとなる）。	
c) 政治理念・政党・哲学	<b>観光の政治的教育的教養の増進的機能、観光参加への積極的影響（グループ旅行等）。外国旅行では観光が人間と国家との媒介者になるし、観光客としての見聞や行動はその国を代表した者となる反面、外国で自国政府の保護を必要とする側面がある。</b>	
d) 道徳・風習・慣習	<b>道徳的諸原理や観光上の諸原則を守ること、および特定地域における風習や慣習を展開することは、観光上の引力・集客力になる（民俗的なもの、イベント等）。</b>	
e) 美術・工芸	<b>すべての人に愛されるもの。美術・工芸は観光の重要な引力であるが、その媒介者でもあり（見学等）、観光は文化形成的機能を持つ。</b>	
f) 宗教（教会・寺社）	<b>宗教自体が観光的活動の組織者となるが、宗教上のイベントは観光引力を持つ。宗教的建築物は観光にとって文化史的名所である。</b>	
g) 観光での言語の意義	<b>関係者の相互理解にとって重要。外国観光では特に重要。</b>	

(出所) Jacob, a. a. O., S.54-57.



ていえば、観光地への移動(旅行)を一時的滞在と同様な位置づけのものと考えられるかどうかにある。そうした移動(旅行)は、観光がなんらかの程度においてとにかく定住的場所を離れた場所での活動である限りにおいては、たとえ観光の本質的要素とはいえないとしても、観光の不可欠の要素とみるべきであろう。

第2の論点は、商用など職業活動のための旅行・一時的滞在も通常の観光と同様なものと扱うかどうかにある。これは端的には、観光の規定のなかに観光の意図ないし目的を含めるかどうかの問題である。というのは観光を旅行・一時的滞在一般としてとらえると、所得獲得活動のいかんは問われないものとなり、商用等のそれも観光に含まれることになるからである。

欧米では、世界観光機関(WTO)が **tourism** についてそうした規定をしていることもあり、**tourism** に商用等を含めるものが多いが<sup>38)</sup>、こうした相違点は、観光の統計的把握の実際的可能性の問題もさることながら、そもそも **Fremdenverkehr** ないし **tourism (Tourismus)** という言葉をどのように解釈し理解するかに起因するところが大きい。日本の場合、観光という言葉は通常、旅行・一時的滞在一般ではなくて、なんかの気晴らしや見聞を広めるという意図・目的をもったそれという意味合いが強いから、観光は自由時間における消費活動と考えるのが妥当と考える。

ドイツ語圏でも **Tourismus** (または **Fremdenverkehr**) について、近時においては、カスパー (Kaspar, C.) のように、それを所得獲得活動のいかんを問わないものとして、旅行・一時滞在一般として規定するものがある一方<sup>39)</sup>、マルティ (Marti, C. F.) によると、それを「動的な自由時間」(**mobile Freizeit**) と規定する考えが有力となっているなど自由時間における活動とする考え方はかなり強い<sup>40)</sup>。すでに1975年ネヴィヒ (Newig, J.) は、前述のポザーの説を批判しつつ、**Fremdenverkehr** では他者(所)との交流や往来に重点がおかれ過ぎるきらいがあるから、それを **Freizeitreiseverkehr** (自由時間旅行往来)、端的には **Freizeitverkehr** (自由時間往来) と呼び変える方がいいとしている。ただしかれば、これは **Tourismus** と同義であるから、**Tourismus** が国際的に使用されつつある事情を考えると、**Tourismus** の方をよしとすると述べている<sup>41)</sup>。

言葉の問題は別として、観光について多様な見解が生まれるのは、いうまでもなく根本的には、考察の観点異なることに起因する。観光には、多様な形態があるとともに、多くの構成要素があるし、より根本的には観光

は人間の活動・生活そのものであるから、人間そのものや社会などと同様多様な側面をもち、人により考察の側面が異なる。周知のようにこれには方法論的に大別して2つのものがある。

第1は、観光を経済学や数学等と同じように純粋科学の観点から考察するもので、この場合にはそれぞれ特有な考察観点により認識対象が構成されることになる。これは理論や概念の純粋性をもつが、観光の全面的全側面的な考察にはならない。今1つは、観光を医学のような総合科学的観点から考察するもので、観光は1つの総合的領域としてとらえられる。少なくとも観光政策という立場等ではこうした考察方法が必要である。

ちなみに、最近のシステム論的アプローチを含め<sup>42)</sup>、こうした考察方法について1998年の書においてもシュポーデ (Spode, H.) は、「多元的ないし学際的な考え方に基づく観光学 (**Tourismuswissenschaft**) が1つの学問として可能であり有意義なものであるかどうかは、論争があるところである。そうした1つの統一的な観光理論を夢みる者もあれば、そうした観光学という名称すらも断固として拒否する者もいる<sup>43)</sup>と述べている。

以上のような多様な見解がどのような形のものに収斂してゆくのか、そしてそうした収斂がそもそも可能なのか、などについては他日の課題としたい。

#### 注

- 1) アメリカのクックらは最新の書において **tourism** という言葉について、それはこれまで多くの異なった定義が試みられてきたものであることを指摘したうえで、要するに「自然的に関連しているところの、定義が困難なサービス活動と当事者の一群のものに付けられたタイトル」であり、その事業は「訪問客サービス産業」(**visitor-service industry**) と呼び変えた方がいいとする見解もある旨述べている。Cook, R. A./Yale, L. J./Marqua, J. J., *Tourism — the Business of Travel*, Upper Saddle River: Prentice Hall, 1999, pp. 5-6. またイギリスのクーパーらも同じく近刊の書において **tourism** という言葉の定義や **tourism industry** の内容について実質的な見解の一致すらもないと述べている。Cooper, C./Fletcher, J./Gilbert, D./Shepherd, R./Wanhill, S., *Tourism Principles and Practice*, 2nd ed., Harlow: Longman, 1999, p. 3.
- 2) Opaschowski, H. W., *Tour — Tourist — Tourismus, eine sprachgeschichtliche Analyse*, in: Prah, H./Steinecke, A. (Hrsg.), *Tourismus*, Philipp Reclam jun.: Stuttgart 1985, S. 10-13.

- 3) たとえば1998年の下記編書において、本文でカスパーは *Fremdenverkehr* と *Tourismus* は同義語としているが、同書タイトルは *Tourismus* になっている。Kasper, C., *Das System Tourismus im Überblick*, in: Haedrich, G./Kasper, C./Klemm, K./Kreilkamp, E. (Hrsg.), *Tourismus-Management*, Walter de Gruyter: Berlin/New York 1998, S. 15, 17.
- 4) 以下のドイツ語圏の観光研究の時期区分は次による。Spode, H., *Geschichte der Tourismuswissenschaft*, in: Haedrich et al. (Hrsg.), *a. a. O.*, S. 911 ff.
- 5) *ebenda*, S. 921.
- 6) Hofmeister, B./Steinecke, A., *Einleitung: zur wissenschaftsgeschichtlichen Entwicklung der Geographie des Freizeit- und Fremdenverkehrs*, in: Hofmeister, B./Steinecke, A. (Hrsg.), *Geographie des Freizeit- und Fremdenverkehrs*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft: Darmstadt 1984, S. 1.
- 7) 当時盛んになってきたソーシャルツーリズムの運動についてもアップラナルプは、それをもたらしたものがまず工業化や交通の発展あるいは大衆旅行組織などにあったというのは全く誤りで、「決定的な動因は、働く人たちの労働時間短縮と結びついた所得改善をめざす闘争であった。……」と述べている。Abplanalp, W., *Sozialtourismus: sein Ursprung und der schweizerische Weg*, in: *Fremdenverkehr in Theorie und Praxis—Festschrift für Walter Hunziker*, Verbandsdruckerei: Bern 1959, S. 13.
- 8) Hofmeister/Steinecke (Hrsg.), *a. a. O.*, S. 3, 4; Keller, T., *Professor Hunziker und das Seminar für Fremdenverkehr an der Handels-Hochschule St. Gallen*, in: *Fremdenverkehr in Theorie und Praxis—Festschrift für Walter Hunziker*, S. 78–79; Spode, *a. a. O.*, S. 913. ちなみにドイツ語圏では1914年観光経営論等の高等教育機関として「ホテル・交通大学」(Hochschule für das Hotel- und Verkehrswesen) がデュッセルドルフに設立され、グリュクスマン (Glücksmann, R.) 等が中心になっていたが、同大学は第一次世界大戦後1921年実質閉校となった。その後1929年このグリュクスマンによりベルリン商科大学に観光研究のための講座的研究所 „Forschungsinstitut für den Fremdenverkehr“ が設立された。同研究所はこの種のものとしてはヨーロッパで最初のものといわれ、活発な活動を行ったが、1933年閉所となっている。つづいて1934年ウィーン商科大学に同様な „Institut für Fremdenverkehrsforschung“ (現在名は Institut für Tourismus und Freizeitwirtschaft)、1941年ハイデルベルク大学に „Institut für Betriebswirtschaft des Fremdenverkehrs“、1941年ベルン大学に „Forschungsinstitut für Fremdenverkehr“ (現在名は Forschungsinstitut für Freizeit und Tourismus) が設けられている。
- ザンクト・ガレン商科大学では1941年フンチカー (Hunziker, W.) により „Seminar für Fremdenverkehr“ が創始され、それが今日では „Institut für Tourismus und Verkehrswirtschaft“ となっている。こうしたこともありドイツ語圏では商科大学が観光研究の1つの拠点となり、経営(経済)学的研究が有力な要素となってきた。1970年代以降今日までにおける爆発的発展の時期についてもドイツの観光研究は、経営(経済)学的研究と地理学的文化学的社会学的研究との2大潮流に分けられている。*ebenda*, S. 912–915; Klemm, K., *Die akademische Tourismus- und weiterbildung in der Bundesrepublik Deutschland*, Haedrich et al. (Hrsg.), *a. a. O.*, S. 925–926. なおアメリカのフリージェンは1996年の書において *tourism* についてのこれまでの研究は多くが経済ないし経済学を土台にしたものであったと指摘している。Fridgen, J. D., *Dimensions of Tourism*, East Lansing: Educational Institute, 1996, p. 31.
- 9) Stradner, J., *Der Fremdenverkehr*, Graz 1905; zitiert aus, Hofmeister/Steinecke (Hrsg.), *a. a. O.*, S. 97–105.
- 10) Spode, *a. a. O.*, S. 912f.
- 11) Schullern zu Schrattenhofen, H. v., *Fremdenverkehr und Volkswirtschaft*, *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, III. Folge, Bd. 42, 1911, S. 433–491.
- 12) *ebenda*, S. 437.
- 13) Sputz, K., *Die geographischen Bedingungen und Wirkungen des Fremdenverkehrs in Tirol*; zitiert aus, Hofmeister/Steinecke (Hrsg.), *a. a. O.*, S. 291–299.
- 14) Morgenroth, W., *Fremdenverkehr*, *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*, 4. Aufl., 4. Bd., Gustav Fischer: Jena 1927, S. 394–409.
- 15) *ebenda*, S. 394.
- 16) Schullern zu Schrattenhofen, *a. a. O.*, S. 437–438.
- 17) Morgenroth, *a. a. O.*, S. 402; vgl. S. 406.
- 18) *ebenda*, S. 402.
- 19) Bormann, A., *Die Lehre vom Fremdenverkehr*, Berlin 1931. (国際観光局訳『観光学概論』(復刻版) 橘書院、1981年、6ページ)
- 20) *ebenda*. (同上訳書、13ページ)
- 21) Poser, H., *Geographische Studien über den Fremdenverkehr im Riesengebirge—ein Beitrag zur geographischen Betrachtung des Fremdenverkehrs*, *Abhandlungen der Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen*, Mathem.-Physikal. Klasse, III. Folge, H. 20, 1939; zitiert aus, Hofmeister/Steinecke (Hrsg.), *a. a. O.*, S. 36–41.
- 22) Hunziker, H., *Fremdenverkehr*, *Handwörter-*

- buch der Sozialwissenschaften*, 4. Bd., Gustav Fischer usw.: Stuttgart usw. 1965, S. 154.
- 23) Hofmeister/Steinecke (Hrsg.), *a. a. O.*, S. 6.
- 24) *ebenda*, S. 39.
- 25) Menges, G., Die touristische Konsumfunktion Deutschlands 1924–1957, in: *Fremdenverkehr in Theorie und Praxis—Festschrift für Walter Hunziker*, S. 137.
- 26) Spode, *a. a. O.*, S. 917; Hofmeister/Steinecke (Hrsg.), *a. a. O.*, S. 3.
- 27) Hunziker, *a. a. O.*, S. 152. フンチカーのこの定義は最初1942年にHunziker, W./Krapf, K., *Grundriß der allgemeinen Fremdenverkehrslehre*, Zurich 1942において提示されたものであるが、そのときには「……旅行と滞在から……」のうち「旅行」はなく、「……滞在から……」のみとなっていた。滞在を重視する傾向を十分うかがうことができる。1954年その定義が広く採択されることになった際「旅行」が挿入された。Spode, *a. a. O.*, S. 917. なおフンチカーのこの定義(本稿本文のもの)は前記Reclam文庫版にも代表的定義として収録されている。Prah/Steinecke (Hrsg.), *a. a. O.*, S. 14.
- 28) この点はSpode, *a. a. O.*, S. 916による。
- 29) Hunziker, *a. a. O.*, S. 152.
- 30) Christaller, W., Beiträge zu einer Geographie des Fremdenverkehrs, *Erdkunde*, Bd. 9, Februar 1955, S. 1–19.
- 31) こうした考え方が後にバトラーにより、製品ライフサイクルになぞらえた観光地ライフサイクル(tourist area life cycle)として展開されている。Butler, R. W., The Concept of a Tourist Area Cycle of Evolution: Implications for Management of Resources, *The Canadian Geographer*, Vol. XXIV, 1, Spring, 1980, pp. 5–12.
- 32) Christaller, *a. a. O.*, S. 2.
- 33) Hofmeister/Steinecke (Hrsg.), *a. a. O.*, S. 7–8.
- 34) Grünthal, A., *Probleme der Fremdenverkehrsgeographie*, Berlin 1934; zitiert aus, Hofmeister/Steinecke (Hrsg.), *a. a. O.*, S. 125–137.
- 35) Jacob, G., Modell zur regionalen Geographie des Fremdenverkehrs, *Geographische Berichte*, 13. Jg. Heft 1, 1968, S. 51–57.
- 36) *ebenda*, S. 51–52.
- 37) *ebenda*, S. 51.
- 38) cf. Lumsden L., *Tourism Marketing*, London etc.: International Thomson Business Press, 1997, p. 3.
- 39) カスパーは1998年の書において観光(Tourismus bzw. Fremdenverkehr)について、フンチカーの前記定義に依拠しつつも、所得獲得活動のいかんを問わないものして、それを「人々の場所の移動と滞在から生じる関係と現象の全体をいうが、ただしその滞在は重要にして継続的な居住地や仕事場とはならないものである」と定義している。Kaspar, *a. a. O.*, S. 17.
- 40) Marti, C. F., *Verkehrs- und Umweltproblematik in touristischen Gebieten—Analyse, Lösungsansätze, Auswirkungen: Untersucht am Beispiel Oberengadin*, Verlag Paul Haupt: Bern usw. 1996, S. 9.
- 41) Newig, J., Vorschläge zur Terminologie der Fremdenverkehrsgeographie, in: *Geographisches Taschenbuch und Jahrbuch für Landeskunde*, Wiesbaden 1975; zitiert aus, Hofmeister/Steinecke (Hrsg.), *a. a. O.*, S. 87.
- 42) たとえばカスパーはこの立場を強く主張している。Kaspar, *a. a. O.*, S. 15–17.
- 43) Spode, *a. a. O.*, S. 922.